おいてけ堀

田中貢太郎

本所（ほんじょ）のお竹蔵（たけぐら）から東四つ目通、今の被服廠（ひふくしょう）跡の納骨堂のあるあたりに大きな池があって、それが本所の七不思議の一つの「おいてけ堀」であった。其の池には鮒（ふな）や鯰（なまず）がたくさんいたので、釣りに往（ゆ）く者があるが、一日釣ってさて帰ろうとすると、何処（どこ）からか、おいてけ、おいてけと云う声がするので、気の弱い者は、釣っている魚を魚籃（びく）から出して逃げて来るが、気の強い者は、風か何かのぐあいでそんな音がするだろう位に思って、平気で帰ろうとすると、三つ目小僧が出たり一つ目小僧が出たり、時とすると轆轤首（ろくろくび）、時とすると一本足の唐傘（からかさ）のお化（ばけ）が出て路を塞（ふさ）ぐので、気の強い者

も、それには顫(ふる)えあがって、魚は元より魚籃も釣竿もほうり出して逃げて来ると云われていた。

金太(きんた)と云う釣好(つりずき)の壮佼(わかいしゅ)があった。金太はおいてけ堀に鮒が多いと聞いたので釣りに往(い)った。両国橋(りょうごくばし)を渡ったところで、知りあいの老人に逢(あ)った。

「おや、金公か、釣に往くのか、何処だ」

「お竹蔵の池さ、今年は鮒が多いと云うじゃねえか」

「彼処(あすこ)は、鮒でも、鯰でも、たんといるだろうが、いけねえぜ、彼処には、怪物(えてもの)がいるぜ」

金太もおいてけ堀の怪(あやし)い話は聞いていた。

「いたら、ついでに、それも釣ってくるさ。今時、唐

傘のお化でも釣りゃ、良い金になるぜ」
「金になるよりゃ、頭からしゃぶられたら、どうするのだ。往くなら、他へ往きなよ、あんな縁儀でもねえ処へ往くものじゃねえよ」
「なに、大丈夫ってことよ、おいらにゃ、神田明神がついてるのだ」
「それじゃ、まあ、往ってきな。其のかわり、暗くなるまでいちゃいけねえぜ」
「魚が釣れるなら、今晩は月があるよ」
「ほんとだよ、年よりの云うことはきくものだぜ」
「ああ、それじゃ、気をつけて往ってくる」

金太は笑い笑い老人に別れて池へ往った。池の周囲（まわり）には出たばかりの蘆（あし）の葉が午（ひる）の微風にそよいでいた。金太は最初のうちこそお妖怪（ばけ）のことを頭においていたが、鮒が後から後からと釣れるので、もう他の事は忘れてしまって一所懸命になって釣った。そして、近くの寺から響いて来る鐘に気が注（つ）いて顔をあげた。十日比（ごろ）の月魄（つきしろ）が池の西側の蘆の葉の上にあった。

金太はそこで三本やっていた釣竿をあげて、糸を巻つけ、それから水の中へ浸けてあった魚籃をあげた。魚籃には一貫匁あまりの魚がいた。

「重いや」

金太は一方の手に釣竿を持ち、一方の手に魚籃を持った。と、何処からか人声のようなものが聞えて来た。

「おい、てけ、おい、てけ」

金太はやろうとした足をとめた。

「おい、てけ、おい、てけ」

金太は忽ち、嘲（あざけり）の色を浮べた。

「なに云ってやがるんだ、ふざけやがるな、糞（くそ）でも啖（くら）えだ」

金太はさっさとあるいた。と、また、おい、てけの声が聞えて来た。

「まだ云ってやがる、なに云ってやがるのだ、こんな旨(うま)い鮒をおいてってたまるものけい、ふざけやがるな。狸(たぬき)か、狐(きつね)か、口惜(くやし)けりゃ、一本足の唐傘にでもなって出て来やがれ」

金太は気もちがわるいので足はとめなかった。と、眼の前へひょいと出て来た者があった。それは人の姿であるから一本足の唐傘ではなかった。

「何だ」

鈍い月の光に眼も鼻もないのっぺらの蒼白い顔を見せた。

「わたしだよ、金太さん」

金太はぎょっとしたが、まだ何処かに気のたしかなところがあった。金太は魚籃と釣竿を落とさないようにしっかり握って走った。後からまた聞えてくるおいてけの声。

「なに云やがるのだ」

金太はどんどん走って池の縁（へり）を離れた。来る時には気が注かなかったが、其処に一軒の茶店があった。金太はそれを見るとほっとした。金太はつかつかと入って往った。

「おい、茶を一ぱいくんねえ」

行燈（あんどん）のような微暗（うすぐら）い燈のある土室（どま）の隅から老人が

ひょいと顔を見せた。

「さあ、さあ、おかけなさいましよ」

金太は入口へ釣竿を立てかけて、土室の横へ往って腰をかけ、手にした魚籃を脚下へ置いた。老人は金太をじろりと見た。

「釣りのおかえりでございますか」

「そうだよ、其所の池へ釣に往ったが、爺さん、へんな物を見たぜ」

「へんな物と申しますと」

「お妖怪だよ、眼も鼻もない、のっぺらぼうだよ」

「へえエ、眼も鼻もないのっぺらぼう。それじゃ、こ

んなので」

老人がそう云って片手でつるりと顔を撫でた。と、其の顔は眼も鼻もないのっぺらぼうになっていた。金太は悲鳴をあげて逃げた。魚籃も釣竿も其のままにして。

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集３　新怪談集」春陽文庫、春陽堂書店
　　１９９９（平成11）年12月20日第1刷発行
底本の親本：「新怪談集　物語篇」改造社
　　１９３８（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２００４年８月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。